

# 残っていた 近代秋田の 遺構



新  
秋田逍遙

文・写真／津島修三

第32回

インターネットのウイキペディアで「アスファルト」について調べてみると、「(わが国では)一般的には明治11

(1878)年に東京の昌平橋に舗装されたのが最初とされ、使用されたのは秋田県の豊川からはるばる運ばれてきた天然アスファルト200俵であった」と記されている。

道の駅しょうわ(ブルーメッセあきた)がある湯上市昭和豊川一帯は古くから天然アスファルトを産出することと知られており、縄文時代後期

にはすでに、人々の暮らしに天然アスファルトが利用されていた形跡が残っている。

天然アスファルトが産出するということは、地中に油層があるということだ。一体に、昭和20年代後半から30年代にかけて秋田県には国内最大の油田が存在し、累積の産油量も国内最大を誇っていた。昭和30年代後半、秋田市郊外の田んぼの中には粗末な木造の動力小屋があり、そこから四方八方に張り巡らされたワ

イヤーを動かして油井から原油をくみ上げていた。いわば、その光景が筆者の少年時代の原風景でもあった。

豊川の地でも大正2(1913)年の油層掘削成功から平成13(2001)年の原油生産停止まで90年近くにわたって、豊川油田の名で最盛期には700本余りの油井を有し、年間87,000キロ(ドラム缶換算で約43万本)ほどの原油を産出していた。

秋田県が「石油王国」であったこ

とは過去の話だが、今豊川の地を訪ねると、奇跡的に動力小屋(ポンビングパワーユニット)が残されている。珍しい大型の木製リールはアメリカ製で大正期に導入されたもの。近代化産業遺産とされているが、むしろ「遺跡と呼びたいほどの歴史的価値のある遺構だ。小屋は風雪にさらされ傷みも進んでいるが、秋田県の近代史を知る「よすが」として、手入れして長く後世まで遺していってほしいものである。

事前予約で現地の産業遺産群の見学も可能。

※お問い合わせは、東北石油(株) TEL.018-877-2069(月～金曜日 8:00～16:30)